



なぞに^み満ちた^{きよ だい}巨大^{めい きゆう}迷宮

ノプロプス
noprops / 原作

くろ だけんじ
黒田研二 / 著

すずら ぎ
鈴羅木かりん / イラスト

卓郎

東部小学校の五年生。頭の回転が早く、決断力と行動力がある。頼れる存在。

ひろし

北部小学校の五年生。小学生とは思えない、洞察力と知識がある。なぞ解きが得意。

たけし

南部小学校の五年生。お調子者で臆病。でも、誰よりも友達思いのイヤツ。

タケル

ビション・フリーゼという種類の犬。大切な人たちを助けるために、怪物と勇敢にたたかった。人間の言葉をすべて理解しているという事実を知ったひろしの提案で、モールス信号を応用し、言葉を伝えられるようになった。

美香

東部小学校の五年生。幼なじみの卓郎と、いつも一緒にいる。運動神経バツグン。



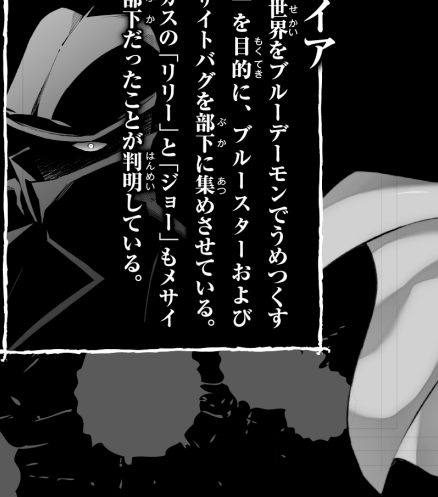
怪物



ブルーベリー色の巨人。人間を見るとおそいかかってくる。ひろしたちはこの夏、「ジェイルハウス」などあらゆる場所での怪物に遭遇したが、犬が苦手であることや、頭が重く泳ぐことができないなどの弱点を突くかたちで、なんとか魔の手を逃れてきた。宇宙から飛来した物質・ブルースターの中に入っていた虫「パラサイトバグ」が体内に入ることが原因で、人間が怪物に変異する可能性があることがわかってきた。

メサイア

「この世界をブルーデーモンでうめつくすこと」を目的に、ブルースターおよびパラサイトバグを部下に集めさせている。サーカスの「リリー」と「ジョー」もメサイアの部下だったことが判明している。



ナオ

北部小学校の五年生。ひろしのクラスメイトで、クロさんとは伯父・姪の関係。



ハルナ先生 せんせい

ひろし達が通う北部小学校の教師。生徒たちが多数失踪し、閉鎖されることになった碧奥小学校の元・生徒でもある。クロさんの悪事を知り、ひろしたちに協力してくれる。行き場を失っていた親友のユズキを迎え入れ、家で一緒に暮らしている。



クロさん

メサイアの元で「カマロ」という名前^{なまえ}で仕え、ブルースターを集めていた。ジェイルハウスでのひろしとの会話^{かいわ}がきっかけで、メサイアに協力^{きょうりょく}することをやめ、今は独自^{どくじ}に行動^{こうどう}しているようだ。



ユズキ

ハルナ先生の同級生^{どうきゅうせい}として碧奥小学校に通っていたが、パラサイトバグを誤^{あやま}って口^{くち}にしてしまい、ブルーデーモンになった。現在は力をコントロールでき^{げん}るようになり、人間^{にんげん}だった頃の姿^{すがた}にも変身^{へんしん}できる。



目次

1	〈サス・ヘンス・ラビリンズ〉へようこそ	007
2	いざ巨大迷宮へ！	017
3	ゲームスタート	027
4	友情の剣	037
5	楽園のロボット衛兵	048
6	迷宮への侵入者	057
7	消えた美香ちゃん	065
8	灰色の怪物	074
9	スフィンクスと不気味な花	085
10	二体の巨神と四角いネスミ	097
11	かくやひめの正体	111

12	残された銀の剣	121
13	疑惑の視線	130
14	青鬼のうわさ	138
15	トンネル内の道しるべ	147
16	たけし君からのメッセージ	155
17	ゲーム？ 現実？	165
18	目覚める巨神	174
19	リアルすぎる脱出ゲーム	183
20	牢屋の前で	194
21	巨大迷宮からの脱出	205
	ひろしによるなぞの解説	213

あらすじ

たくろうくん とお つか あ きよだいめいきゆう
卓郎君のお父さんが作り上げた巨大迷宮くサスペンス・
ラビリンズ。オープン前に体験モニターとして招待され
た、ひろし君、たくろうくん みか くん
た、ひろし君、卓郎君、美香ちゃん、たけし君、そして
ぼく——タケルは、さらにげんち ごうりゆう せいぶしょうがっこう
通うスグル君とともに迷宮の中を進んでいくことになった
んだ。だけどぼく、スグル君にはひろし君といっしょに
かよ くん めいきゆう なか すず
会うことがあったよ。君の本当の名前は、「ナオキ」君だ
よね？ どうしてうそをつくんだろう……？ めいきゆう ようす
もおかしいみたいだし、早くみんなで脱出しくちや。

「ブルースター」
二十年前、隕石として宇宙から飛来し、碧奥町を中心とするあちこちに今も散らばっている。見た目は星型の入れ物のようになっていて、それが危険なものだと知らずに所持している人間もいるようだ。中にはパラサイトバグが入っている。
「パラサイトバグ」
ブルースターの中に入っているイナゴのような見た目の虫。死んだように見えても、生きていることがある。パラサイトバグを体内に取り込んだ人間や動物は、ブルーデーモンになってしまう。ブルーデーモン化した人間は凶暴な性格になることが多いが、まれに自分の意思を保ちながら、うまくブルーデーモンの力を使うことができる人間もいる。

1 〈サスペンス・ラビリンス〉へようこそ

コンクリートの高い壁にびつしりとはりついたツタの葉っぱ。

まるで、植物だけで壁が作られているようにも見える。

その真ん中に、木製の大きなとびらが立ちはだかつていた。とびらには古代エジプトの壁画を連想させる、絵とも文字ともわからぬものが細かく刻まれている。

とびらの上部には英語で〈SUSPENSE LABYRINTH〉と書いてあった。

「サスペンス……ラビリンス」

美香ちゃんがその文字を声に出して読む。ひびきはカツコイイが、英語があまり得意じゃない。ぼくには、それがどういう意味なのかよくわからない。

たけし君もぼくと同じだったらしい。

「なんだかおいしそうな名前だな」

舌なめずりをしながらいう。もしかしたらサフランライスかなにかとかんちがいているのかもしれない。



とびらの両脇には石像が立っていた。高さは二メートルほど。顔がやたらと大きくて、どことなくブルーデーモンに似ている。とびらを守る門番かなにかだろうか？

「みんな、よく来てくれたね」

メガネをかけた背の高いおじさんが、物静かな口調でいった。彼は大型ホームセンター〈スマイル〉の社長さん。実は、卓郎君のお父さんでもあったりする。

「今日はお招きいただきありがとうございます。まます」

卓郎君のお父さんに向かって、ひろし君は「いいねにあいさつを返した。」

「見事なアマツラですね」

「アマツラ……ええ？」

「壁に生えてるツタのことだよ、兄さん」

とまどう「へスマイル」の社長さんに向かつてそう説明したのはぼくのお父さんだった。ぼくのお父さんは社長さんの弟だ。つまり、卓郎君のお父さんとお父さんは兄弟であり、だから卓郎君とぼくはいとこ同士ということになる。もちろん、それはぼくが人間だったならばという話だけだ。

「アマヅラから採取できる樹液を煮つめたものはとてもあまく、奈良時代から室町時代にかけては甘味料としても使われていたそうです」

「へえ。それは知らなかった」

ひろし君の説明に、卓郎君のお父さんは感心したようにうなずいた。

「ここにあるツタ……アマヅラだっけ？ からでも甘味料は採れるのかな？」

「おそらく。枝があまり太くないので、わずかな量かもしれませんが」



「これはいいことを聞いた」

卓郎君のお父さんはにつこりと笑った。

「この先には森が広がっているだろう？ 私はここに、大自然とのふれあいをテーマにしたアミ

ューズメントパークを造ろうと考えているんだ。その第一弾がこれ——来週オープンする予定の

〈サスペンス・ラビリンス〉だ」

そういつて、木製のとびらを指し示す。

「大自然に囲まれたこの場所で、都会では絶対に味わえない体験をみんなにしてみたいと思

っている。ツタの枝から甘味料を採取するなんて、実に面白そうじゃないか。早速、部下に調査

を進めさせよう」

「これからさらにいろいろなものができあがっていくんですね。楽しみ！」

美香ちゃんはずんだ声を出した。

「ああ。カヤックでの川下りだったり、森の木々をそのまま利用したアスレチック広場だった

り、一日中楽しく遊べるアトラクションをあれこれ企画中だよ」

「だったら、森のレストランを造ろうよ！」

そう口にしたのはたけし君だ。

「食べられる木の实やキノコを見つけてきてその場で調理するんだ。あ、これだけ広い場所なんだからさ。畑も作って野菜を育てちゃうっていうのはどう？」

「キャンプみたいで楽しそう！ バンガローとかあつて寝とまりできたらもつといいよね」

たけし君と美香ちゃんのおしやべりは止まらない。ふたりとも目をキラキラさせながら、いつか完成するであろうアミューズメントパークについて語り合っている。

話を聞いているうちに、ぼくもワクワクしてきた。動物たちが自由に走り回れる公園なんかもあつたらステキだなあ。

ひろし君は「サスペンス・ラビリンス」の壁に近づき、ツタの葉を観察している。卓郎君はみんなから少しはなれたところに立って、雲ひとつない空を見上げていた。

さつきから卓郎君はひとこともしやべっていない。もしかして、からだの調子でも悪いのだろうか？ いっしょに来る予定だったナオちゃんも、かぜをひいたと連絡があつて今日はお休みだ。冬が近づき、最近朝晩めつきり寒くなったので、体調をくずす人が多いと聞いている。卓郎君もそうでなければよいのだけれど。

ひろし君、卓郎君、美香ちゃん、たけし君の四人は、卓郎君のお父さんの招待で、来週オープン予定のアミューズメント施設——碧奥山のふもとに造られた巨大立体迷路へサスペンス・ラビ

リンス)にやってきた。

オーブン前に(サスペンス・ラビリンス)を体験して、その感想を聞かせてほしいということらしい。

迷路といえ、ふつうは紙の上に書かれているものだけど、それを立体化させ、実際に歩き回ることができるとか。

この施設の建造には、ぼくのお父さんも深く関わっている。ということは、ただの迷路ではなく、あちこちにワクワクするようなぞがしかけられているのだろう。

『巨大迷宮(サスペンス・ラビリンス)へよおおうこそ』

突然、とびらのほうから声が聞こえた。ブルーデーモンに似た石像の目が青白い光を放つ。

「うわ、なんだ？　なんだ？」

おどろいたたけし君は、とっさにぼくのお父さんの後ろにかくれた。その逃げ足の速さにはいつも感心する。

『もしかして君たちいい、この中へ入ろうとしているのかなあ？　うううん、やめておいたほうがいいと思うけどなあ。ここは迷宮。一度入ったら、二度と出てこれないかもしれないよ』

ずいぶんとしばいがかつた口調だ。

『おいら、ちゃんと忠告したからねええ。それでも中に入りたいたいというのなら……まあ、仕方がないやあ。ぐつどらああつく！ 幸運をいのつているからねえええ』

石像の大きな顔がぐるんと一回転する。

「ぶひやあつ！」

たけし君のキテレッツなさげび声。

それつきり、石像はなにもしやべらなくなつてしまつた。

「面白そう！ 早く行こうよ！」

美香ちゃんが卓郎君のうでをつかむ。

「あ……ああ」

卓郎君はややとまどい気味だ。

「やめたほうがよくない？ 中に入つたら二度と出られないかもしれないっていつてたよ」

ぼくのお父さんの背中にしがみついたまま、たけし君が情けない声を出す。

「なにいつてるの？ ホントに出られなくなるわけないでしょ。あれは演出」

「だけど……」

「どうやら、たけし君は本気でこわがっているようだ。いつもなら、そんなたけし君のことを卓郎君がからかうのだけれど、今日はまったくそんなそぶりを見せない。やつぱり、どこからだの調子がおかしいのだろうか？」

「ちよつと待って」

とびらに近づこうとする美香ちゃんを、卓郎君のお父さんが呼び止めた。

「ヘサスペンス・ラビリンス」は五人ひと組で行うゲームなんだ」

「五人つてことは……」

美香ちゃんはこの場にいる人の数を数えて、先を続けた。

「子供が四人に大人がふたりの合計六人」

犬が一匹いることも忘れないでね。

「ひとり多いね。じゃあ、オレはやめておくよ」



即座にたけし君がいう。

「大人は参加しないよ。私も弟も（サスペンス・ラビリンス）のことは知りつくしている。そんな人間が仲間にいたら面白くないだろう？ それに私たちは君たちが迷宮に入ったあと、モニタールームへ移動してシステムの監視をしなくてはならないからね」

卓郎君のお父さんは笑いながら答えた。

「でも、それじゃあ参加者が四人になっちゃう。五人ひと組じゃなきやダメなんですよね？」

「どうやらナオちゃんも参加できなくなつたせいで、人数が不足しているらしい。」

「もしかして、タケルを入れて五人つてこと？」

それまでずつとだまつていた卓郎君が初めて口を開いた。

「タケルはたよりになるし、頭もいいから、この冒険に同行させるのはかまわないけど、人間ではないからね。だから急ぎよ、助っ人を呼んだんだ。そろそろ到着するはずだから、もう少し待つてもらえるかな？」

「ぼくのお父さんがそう説明したのとはほぼ同時に、東の方向からこちらに向かって走ってくる自転車が見えた。」

「ああ、来たみたいだね」

そよ風かぜにのつて、五人目ごにんめの参加者さんかしゃのにおいが届とどく。

ぼくはそのにおいを知しっていた。

「お待またせしました」

ぼくたちのそばまでやってきて自転車じてんしゃを止とめたのは、以前いぜん、ぼくの家の近ちかくの公園こうえんで出会であった
西部せいぶ小学校しょうがっこうに通かよう小学五年生しょうがくごねんせいの男おとこの子こ——ナオキ君くんだった。

2 いざ巨大迷宮へ！

ぼくとひろし君がその男の子に出会ったのは今から約三カ月前——（ジェイルハウス）で初めてブルーデーモンにおそわれた数日後のことだ。

人気アニメ（デビルくん）のTシャツを身に着けた彼——ナオキ君は、公園のブランコにゆられながらひどくふさぎこんでいた。

ナオキ君は幼なじみの女の子——サツキちゃんのことだなやんでいたのだが、ひろし君は得意の推理で、ナオキ君のなやみをあつという間に解決したのだった。

ひさしぶり！

ぼくはしつぽをふって、ナオキ君にあいさつした。

ナオキ君はぼくのほうに目をやって、ほんの一瞬、表情を変えたように見えたが、すぐにそっぽを向き、卓郎君のお父さんと会話を始めた。どうやら、ぼくのこととはわすれてしまったらしい。悲しいけれど、顔を合わせたのは三カ月前のわずか数十分。記憶にないのも仕方なかった。

「あの……すみません。ドライバーを持っていませんか？」

ナオキ君が卓郎君のお父さんにいう。

「ドライバー？ どうして？」

「自転車のベルを留めていたネジがゆるんじやったみたいで」

乗ってきた自転車に近づき、ハンドルに取りつけられたベルにさわりながら、ナオキ君は困ったような顔をした。

「すまない。今は持っていないなあ。事務所にもどればあるかもしれないけど」

「あ——あたし、持ってるよ」

美香ちゃんがふたりの会話に割って入る。

「役に立つかどうかわからないけど……」

そう口にしながらか、髪留めに手をそえた。ネコのイラストがえがかれたかわいらしいクリップだ。

「これ、先がかたくて細かいから、ドライバーの代わりになるんじゃない？」

「あ……どうもありがとう」



ナオキ君は照れくさそうに笑った。

「でも、そんなかわいいクリップを使うのはちよつと抵抗があるなあ。折れ曲がったら大変だし。帰りに自転車ショップで直してもらおうことにするよ」

そういつて美香ちゃんに頭を下げる。

ナオキ君の姿に気がついたのか、さつきまでツタの葉を熱心に見ていたひろし君がこちらへやつてきた。感情がおもてに出ないのでわかりにくいだが、記憶力ばつぐんのひろし君だから当然、ナオキ君のことだつて覚えていられるだろう。

「紹介しよう」

卓郎君のお父さんがいう。

「彼は君たちと同じ小学五年生。西部小学校の児童だ。名前は——」
知つてるよ。ナオキ君でしよう？

「スグル君だ」

……え？

ぼくは首をかしげた。

卓郎君のお父さん、まちがつてるよ。その子はスグル君じゃなくてナオキ君だつてば。

「はじめまして。スグルです」

しかし、ナオキ君は卓郎君のお父さんのあやまりを訂正することなく、ぼくたちに向かってぺこりと頭を下げた。

「サスペンス・ラビリンス」のオープンを告知するサイトに、〈迷宮なぞ〉というコーナーがあったんだけど、みんな挑戦してくれたかな？」

ぼくのお父さんが口を開く。〈迷宮なぞ〉のことならもちろん知っていた。碧奥町に関する十問のなぞに正解すると〈サスペンス・ラビリンス〉の無料招待券がもらえるという企画だ。

なぞを考えたのはぼくのお父さん。気合いを入れすぎて、難易度の高いなぞばかりになってしまったらしい。今のところ、全問正解者はひとりしか出ていないと聞いている。

ひろし君がパソコンに向かって〈迷宮なぞ〉に挑戦しているところを、ぼくも後ろからのぞいたことがあったけど、一問目からすでにチンプンカンプンで、ぼくにはさっぱりわからなかった。ひろし君は十問目の答えをまちがえて全問正解にはいたらなかったらしい。ひろし君にも解けないなぞを作ってしまうなんて、お父さんもなかなかやるじゃないか。

だけど、お父さん以上にすごいのが、全問正解した人だ。その人はひろし君よりもなぞときの才能があるということになる。一体、どんな脳みそを持った人なんだろう？

「スグル君は〈迷宮なぞ〉に全問正解したたつたひとりの人なんだ」

お父さんの言葉に、ぼくは大きく目を見開いた。

たけし君がおどろいた表情をスグル君に向ける。どこからどう見ても彼はナオキ君なんだけど、とりあえず今はスグル君と呼ぶことにしよう。

「ひろしも解けなかつた難問なんでしょう？ それを解いちやうなんて、君、すごいんだね」
美香ちゃんは興味津々な様子で、スグル君をじろじろと見た。

「いえ、ボクなんて全然……たまたま正解しただけで……」

スグル君がはずかしそうに答える。照れ屋なのか、さつきからだれとも目を合わせようとしな
い。

「ナオちゃんが参加できなかつたのは残念だけど、代わりにひろしと同じくらい頭のいいヤツがいるなら安心だな。さあ、早く出発しようよ！」

ついさつきまで〈サスペンス・ラビリンス〉に入ることをこわがっていたのに、毎度のことながらたけし君は単純だ。

「よし。じゃあ全員そろつたし、そろそろ始めようか」

卓郎君のお父さんがいう。